

2011年 9月18日・静岡新聞「大自在」欄では

寿命の延びとともに認知症も100万人を超えると聞くが、特養ホームに義母をあずかってもらって以降は何事につけ早め早めが習いになった。これも早めにと敬老の日を祝いがてら義母を見舞った帰り道、静岡在住の詩人岡村直子さんの詩集『帰宅願望』を思い出した▼〈山百合は母の嫂が好きだった／一度だけ 港町に住むその人に／抱えるようにして届けたことがある／わたしがまだ娘の頃のこと／その嫂に母は冷遇されたと聞く／小姑の母がまだ幼い頃の話〉とつづる「山百合」をはじめ、集中どれもこまやかさに包まれる▼ひとしお胸をかきたてるのは「縮み」。おにぎり、おすし、縮緬^{ちりめん}、盆栽、…日本文化は縮みと捉えて〈脳が縮む 目が縮む／腿も乳房も縮む／心が縮む 恐ろしくて身が縮む／絆が縮む 地球の秩序が縮む〉と受け、〈丸くなった母の背は言ったものだ／精神までは縮んでいません と〉▼義母との面談も常にそんな詩句に似た調子だ。隣室の女性は医療費も重なって年金だけではまかないきれず、田舎のホームに移って行った。もう一つ隣の女性はしっかりしているのかいないのか四六時中、家族への文句ばかり▼相手構わずあたってストレスがたまる一方だとかぼしながら、車椅子を器用に操って古びたアルバムを取り出したり。嫁しゅうと、昔かたぎだった連れ合いの話となつてとそれこそやむことはない▼昭和という激動の時代を背負ってきただけに老いては過去も現在も同居して思い出話も尽きることはないのだろう。家族のありようもすっかり様変わり、互いを安心に包むには施設での介護は大助かりだが、どこも満室と聞く。100人待ちとも200人待ちとも。

と紹介されています。